

反中・嫌中への分水嶺を作った一冊の本

——名存実亡の田中角栄・周恩来共同声明

横浜市立大学名誉教授 矢吹 晋（会員）

昨春秋は田中角栄・周恩来共同声明以来、半世紀の日中関係を顧みるいくつかのイベントが行われたが、はなはだしく盛り上がりを欠いたものであった。「台湾有事」なる得体のしれない幽霊が人々にとりつき、中国を含む仮想敵に対する先制攻撃が論じられて「日中不再戦」の誓いは、雲散霧消したように見える。過去半世紀にわたって日中関係を見つめてきた老生にとって、不安は尽きない。日中関係はどこでボタンを掛け違えたのか。

手元に一冊の本がある。服部龍二著『日中国交正常化』（中公新書、2011

1年）である。これは2012年の田

とした。

中訪中40年を記念して、その前夜に歴史を顧みて発表された。まことに時宜を得たテーマであるから、早速一読したが、深い失望を感じないわけにはいかなかった。「田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦」というサブタイトルが付されている。遺憾ながら、本書は「官僚たちの挑戦」という自画自讃に終始して、田中や大平の肉声は抹殺された。帯封には「本当の政治主導とは」と書かれていたが、私は「本当の官僚主導とは」と誤読したほどだ。その後、一連の驚くべき事態が続いて私は茫然

なんと本書が毎日新聞の呼びかけで設立されアジア調査会の設けたアジア太平洋特別賞を得たかと思うと、重ねて朝日新聞が創設した大佛次郎論壇賞を得たのだ。前者の会長は栗山尚一元アメリカ大使（田中訪中時は条約課長）である。官僚礼讃の手前味噌にみずから賞を与えたとしても、ご愛嬌と一笑に付すべきかもしれない。ところが、大佛次郎論壇賞の審査委員諸氏は、佐々木毅元東大総長、山室信一京大教授、橘木俊詔同志社大教授、米本昌平東大特任教授、朝日新聞論説主幹大軒由敬

等、日本を代表する識者と見られている人々だ。たとえ愚作・駄作だとしても、ここまで持ち上げられると、もはや一人歩きして、この本に書かれた誤謬の数々が〈定説〉になっては困る。私の懸念は果して杞憂ではなかった。その後10年、日中関係は年を追って悪化し、今日を迎えた。

何が問題か。服部の「第11回大佛次郎論壇賞受賞」記念のエッセイから、3つのキーワードを選ぶ。まず、チャイナ・スクール外し、次いで尖閣諸島問題、最後に、日中講和の精神、である（『朝日新聞』2011年12月22日）。講和の精神を説いて、服部はいう。「日本人はあの戦争を忘れないし、そのことを前提に中国人は寛容の心で日本と向き合う。そして日中両国は、ともに善隣友好関係を築いていく。それが日中講和の精神ではなかるうか」。これは一見、優れた見識に見える。では、服部は、前掲書で「日中講和の精神」をどのように描いたか。いうまでもなく田中角栄・周恩来会談のハイライトは、1972年9月26日午後に行

なわれた第2回首脳会談である。冒頭、周恩来は、前夜の田中挨拶の一句「ご迷惑」に触れてこう批判した。「田中首相の『中国人民に迷惑をかけた』という言葉は中国人の反感をよぶ。中国では迷惑とは小さなことにしか使われなからである」。このシーンを服部は、こう描く。「その模様を橋本は、「（周総理は）怒髪天をつかんばかりの怒り方だったですからね。大平さんは一瞬蒼くなっちゃった」と述べる」。服部はこう続ける。「スピーチを酷評された田中は、言い返さなかったのか。日本外務省の記録には出てこないが、田中は「ご迷惑」を周に批判されると、その場で言い返していた。田中自身が、次のように述べたと記している」と。

日本外務省記録には出てこないがと、服部は、あっさり片づけるが、日本外務省記録には出てこない事実の重みが服部にはまるで理解できていない。服部は続けてこう書く。「その場にした橋本に確認したところ、『ご迷惑』発言については、「田中自身が」周発言の直後にちゃんとやりましたよ」と

のことだった」と記述し、その典拠として、服部自身による「橋本へのインタビュー12008年11月8日」を挙げている。これはきわめて重大な証言なのだが、その深刻な意味に服部は気づいていない。なぜ重大なのか。「その場にいた橋本」は、外務省首脳会談の記録に残す義務を負うからだ。にもかかわらず、その後情報開示によって明らかになった記録には、この部分が削除されている。誰がなぜ削除したのか。それは許される行為か。公的記録の改竄ではないのか。

後に外務省が情報開示した記録によると、田中は「大筋において周総理の話はよく理解できる」と述べたことになっている。「怒髪天をつかんばかりの怒り方」をした周恩来発言に対して、田中が「大筋においてよく理解できる」と答えたとは到底信じられない。この記録は修正・改竄が行われているに違いないと確信して、調査を始めた。2010年代初頭、折からの小泉首相による靖国参拝と江沢民主席による反日政策のもとで日中関係が急速に悪化し

ていたときだ。私は、まず田中の帰国後の一連の発言を可能な限り集め、ついで中国に向いて、中共中央文献・党史研究院を訪ねて、日本外務省記録で削除された部分の復元を試みた。その内容を、私は春の定年を前にして、2004年1月26日横浜市立大学最終講義で「日中誤解は迷惑に始まる」と題して講義した。

その中国語訳は「田中角栄与毛沢東 談判的真相」のタイトルで『百年潮』2004年2月号に発表され、次いで『新華文摘』2004年10号に転載された。さらに加筆したものを「田中角栄の「迷惑」、毛沢東の「迷惑」、昭和天皇の「迷惑」」のタイトルで『諸君』2004年5月号に発表し、その要旨は矢吹の著作選集第4巻『日本—中国—米国、台湾』（未知谷、2022年）に収めた。

さて、中共中央文献・党史研究院の陳晋研究員が未公開資料を外国人に閲覧させることはできないが、該当箇所を書き抜いた一節として、私に与えた紙片には、こう書かれていた。

・田中：日本語と中国語とは、言い方が違うのかもしれない。

・周恩来：訳文が好くはないかもしれない。この箇所の英訳は「make trouble」です。

・田中：迷惑とは、誠心誠意の謝罪を表します。この言い方が中国語として適当かどうかは自信がない。迷惑という言葉の起源は中国だが。

ここで中国側が「誠心誠意の謝罪」と訳した部分の田中の日本語発言は、彼の自民党における報告会での記録によれば、「東洋的に、すべて水に流そうという時、非常に強い気持ちで反省しているというのは、こうでなければならぬ」と語った可能性がある。あるいは二階堂進官房長官のブリーフィングから推測すれば、「万感の思いを込めておわびするときにも使うのです」と説明、弁明したはずだ。こうして田中・周恩来会談で合意した内容を日中双方が確認したのは、9月27日夜8時の毛沢東書斎における会見であった。ここには田中のほか大平外相・二階堂官房長官のみが招かれ、日本側は通訳

も書記もいなかった。会見の様子は、二階堂長官による記者会見のみが唯一の日本側資料である。2011年12月22日の情報開示に含まれていたのは、この部分であるが、内容は当時のマスコミ報道と変わりが無い。陳晋研究員が示した中国側記録を訳して見よう。

・毛沢東：あなた方は、あの「添麻煩」問題は、どのように解決しましたか。

・田中：われわれは中国の習慣にしたがって改めるよう準備しています。

・毛沢東：一部の女性の同志が不満なのです。とりわけ、あのアメリカ人は、ニクソンを代表してものを言うのです。

最後の発言は毛沢東一流のジョークであろう。日本側通訳はいなかったが、毛沢東は日本語通訳2人（林麗韞、王效賢）のほかに、英語通訳も同席させていたことが分かる。いずれにせよ、毛沢東は冒頭、「どのように解決しましたか」と過去形で尋ね、田中が「中国の習慣にしたがって改めるよう準備しています」と答えたのは、一つは共同声明に盛り込む文言を指すであろう

し、また会談記録で、「ご迷惑という日本語部分の中国語訳が不十分ならば、適当な表現を中国側から提起してほしい。それをもって田中自身の謝罪とする」とまで相手側の胸中に踏み込んだ田中の姿勢を説明したものと読める。

こうして、田中・周恩来の間で誤解が解け、それを追認するセレモニーが毛沢東の書齋で行われた経緯は、当時の二階堂長官の記者会見等からすでに明らかであった。とすれば、ここで醸成された相互理解こそが「日中講和の精神」と呼ばれるべきであろう。なお、日中のこのやりとりは、『毛沢東年譜』（第6巻、2013年12月、449頁）にその後、発表された。

以上の文脈を顧みると、その場で言い返していたという服部の表現は、まるで状況にそぐわない過ちだ。ここで田中が「言い返していた」ならば、会談は決裂したに違いない。田中・周恩来会談の急所について、かくも安易な杜撰を行う著者が「日中講和の精神」を語っても、到底素直に受け入れられまい。毛沢東の書齋を辞した後、9月

27日夜10時10分から28日午前零時半まで、迎賓館で第3回外相会談、すなわち「最終会談であり、かつ最も重要な会談」が行なわれた。ここで日中共同声明の前文に書かれた文言が確定した。「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」。この経過を『当代中日関係・1945―1994』は、次のように記述している。この箇所は、大

平外相が一字一句口述したもので、これをもって『添了很大的麻煩』の言い方と代替したものである。この記述から分かるように、「責任を痛感し、深く反省する」という表現によって、「たいへんなご迷惑をかけた」という言い方は、置き換えられたと見るのが中国側の見解なのだ。しかも大平外相は、一字一句丁寧に述べたのである。ここには大平の人柄がにじみ出ている。田中訪中直後の1972年10月国会における大平外相演説（第70回国会、昭和47年10月28日）で、大平は、次のように信条を吐露している。

「私は、何をおきましても、日中相互の間に不動の信頼がつかわれなければならぬと考えます。われわれはお互いのことばに信をおき、かつ、お互いのことばを行為によって裏書きすることが必要であると思えます。（拍手）さらに、両国が、アジア地域の平和と安定、秩序と繁栄に貢献することが肝要であると思えます。そのためにわれわれは何を行なうべきか、何をこなしてはならないかについて、正しい判断を持ち、慎重に行動すべきであると考えております。日中両国は、このような不動の信頼とけじめのある国交を通じてのみ、両国間に末長き友好関係を築き、発展させることができるものと考えます。政府としてはこのためにせっかく努力をいたす所存であります（拍手）。（傍線は矢吹による）国交正常化交渉に臨んだ大平の信念はここからも読み取れる。これこそが「日中講和の精神」と呼ぶべきなのだ。橋本が軽々しく「ご迷惑でよい」等と語るのには、信義に悖る。

次に服部のキーワード「尖閣諸島」

はどうか。服部の受賞エッセイはいう。尖閣問題は「そもそも議題にしなかった」「中国は事実上、尖閣諸島を放棄したと見なされてもやむをえない」「国交正常化で主張しなかった領土について、いまさら「中国固有の領土」に組み込もうとするのは不可解」と記す。これまた相当に乱暴な一方的主張であり、これが「日中講和の精神」ならば、いよいよ日中関係は危うい。最後のキーワード「チャイナ・スクール外し」の功罪は、あとで触れる。本書は、日中国交正常化を論じるに際して、栗山尚一や橋本恕の一方的な主張・回顧を書きとめたにすぎず、中国側の対日政策・対日像はほとんど浮かび上がらない。これでは「中国不在の日中交渉」にならざるをえない。このような駄作・欠陥商品が、日中国交正常化40周年に出版され、2つの新聞社が持ち上げたことは、日中の相互誤解を促進するおそれが強い。

顧みると、改竄の嚆矢は1988年9月外務省中国課が執務資料としてまとめた「日中国交正常化交渉記録」で

ある。その後、情報開示法に基づいて公開された会談記録は、88年にタイプ印刷物に収められたものと同一であり、岩波書店等の資料集に収められたものはこれである。1972年の田中訪中から20年を経て、1992年には天皇訪中も行われ、日中間の歴史問題はすべて全面的に解決した、と日中双方の関係者が安堵したのは、天皇訪中が成功裏に終わった時であった。かつて青嵐会の闘士として田中訪中反対の急先鋒であった渡辺美智雄は外相として訪中に随行し、20年の歳月の変化を印象づけた。ところがまさに橋本恕が駐中国大使として尽力したとされる天皇訪中の直後から、日中間のさざなみが広まり深まる。最初の一石は「チャイナ・スクール外し」の中国課長として交渉の実務を担当し、その後アジア局長を経て中国大使を務めていた橋本恕の証言であった可能性が強い。

1992年9月27日にNHKが放映したテレビ番組で、当時の駐中国大使が田中訪中の往時を回顧して「迷惑」という言葉の選択は正しかったと繰り返

返した。この国交正常化20周年に行われた橋本恕証言は、田中の必死の釈明、あるいは真意説明を帳消しにする役割を果たしたことで、責任はきわめて重い。2つの表現のニュアンスの差異が問題になり、これは「外務省の翻訳間違い」ではないか、と「誤訳の問題」として中国側は処理しようとした。

ところが、橋本は、意外にも断じて翻訳の問題ではないと断言してしまった。「迷惑」を「麻煩」と訳したのは、誤訳ではなかったかというNHK記者の問いかけに対して、橋本は「決して翻訳上の問題ではなく、当時の日本国内の世論に配慮したギリギリの文章であった」と答え、次のように補足した。「私は何日も何日も考え、何回も何回も推敲しました。大げさに言えば、精魂を傾けて書いた文章でした。もちろん大平外務大臣にも田中総理にも事前にも何度も見せて、「これでいこう」ということになった」。これはすれ違いの問答である。橋本の念頭にあるのは「迷惑」の2文字だけで、その中国語訳ではない。にもかかわらず、誤訳か

否かと問われて、誤訳ではないと橋本は答えてしまった。橋本が大平や田中に対して、訳語の話をした形跡はない。日本語の「迷惑」を基調として挨拶文を書いたという話だけなのだ。記者が問うているのは、日本語の「原文そのもの」ではなく、その中国語訳であるにもかかわらず、聞き手の記者も、答える橋本も、そのすれ違いに気づいていない。これが国交正常化20周年の弛みきった日中関係であった。

橋本がもし原文の推敲に費やしたエネルギーの一割でも、中国語訳文の推敲に費やしていたならば、歴史的誤解は避け得たはずだが、「チャイナ・スクール外し」によって手柄を独占しようとした橋本には、その核心が見えない。こうして橋本は日中誤解を無意識のうちを増幅する基礎を作った。すなわち正常化20周年までは、「田中のご迷惑Ⅱ誠心誠意的謝罪」と「橋本のご迷惑Ⅱ添麻煩」、2種類の説明が玉虫色で併存していた。しかしNHK番組における橋本の断定および田中の発言を削除した日中会談記録が流布した

結果、田中謝罪が消えて、「橋本流のご迷惑」が日本政府の公式見解に格上げされる結果となった。NHKは翌1993年、番組を活字化して『周恩来の決断』という本を出版し、これは翌94年に中国語訳された。この中国語訳に、日本語原本にはない、姫鵬飛相の回顧録「飲水不忘掘井人」が付されたが、これは意味深長な付加であった。私自身は、この文章をまとめた李海文さん（中共中央文献・党史研究院研究員）から直接教示を受けて、その意味を調べた。姫鵬飛回想録はその後『周恩来的最後歲月』（中央文献出版社、1995年）等に再録され、また張香山、吳学文等、中国側関係者も回想録等の形でこの問題に言及しているので、

いまでは中国側の立場はほとんど明確になっている。これらの証言を率然と読むと、問題の所在が分からなくなる。その後、1995年前後から江沢民流の愛国教育運動という形の反日運動が広範に展開されたが、そこで大衆を煽動する口実として最も広く用いられたのが「戦争を謝罪しない日本」とい

う罵倒の決まり文句であった。大平は1980年に急逝し、田中も93年に死去したが、もし彼らが存命ならば、中国側の誤解と、誤解へ導いた橋本の解釈を激怒したに違いない。当時、外務省は誤解を解く努力をどのように行ったか、はなはだ疑わしい。会談記録改竄に責任を負う橋本や、栗山のような向米一辺倒の高官が外務省を牛耳るなかで、日中関係の悪化は、日本の防衛力増強、日米安保再強化の口実として悪用された。服部は前掲『朝日』エッセイの冒頭で、日中交渉について、「チャイナ・スクールは排除されていた」としたり顔に書いている。より重要な問題は田中が第2回会談で必死に「万感の思いを込めて」と力説した時点の後で

訳語をどのように訂正したかである。田中の「ご迷惑」を「添麻煩」と訳したことが大問題になったことを知る立場にありながら、「訳語は」プラスもしなければ、マイナスもしない。似合った言葉を探してくるほかない」と開き直る。これは外交官の言葉といえるであろうか。今どきのロボットでさえも、

相手の表情を読み取り、言葉を選択するではないか。「ご迷惑」「添麻煩」で済むとは、とんでもない開き直りではないか。少なくとも田中が「ご迷惑」「誠心誠意的謝罪」と弁明した後では、田中の真意とずれていたことを認めつつ、ただし、翻訳した時点では田中の真意を誤解したと正直に語るのが、最小限の常識ではないか。

毛沢東が田中に『楚辞集注』を贈呈したことについて、さまざまの解釈が行われてきたことは周知の通りである。では「毛は、なぜ田中に『楚辞集注』を贈ったのか」「橋本は、作詩の参考に供するためだったと解する」として、橋本の解釈をこう書いている。「田中さんが詩を作ったり、詩を勉強するのであれば、これがいいだろうと言って、『楚辞集注』を田中さんに詩を作る参考になるようにということとで上げた。田中から毛沢東への土産は、東山魁夷画伯の「春曉」(20号)、周恩来へは杉山寧画伯の「韻」(20号)であった。これに対して毛沢東が『楚辞集注』をお返しとしたことはよく知られていた

が、橋本の解釈は「作詩の参考に供するため」というものであり、これは当時の時点で各紙がこの説を紹介し、同時に「もし作詩の参考ならば、『唐詩選』がよりふさわしい。『楚辞集注』はふさわしくない」と見る識者のコメントもしばしば行なわれた。服部は「2008年11月8日のインタビュー」として、橋本が国交正常化36年後も依然、「作詩参考説」を堅持したことを記している。問題はその典拠である。服部の記述(前掲書、第8章注17)を見ると、「通訳の周斌は、毛が『楚辞集注』をニクソンにも贈っており、他意はなかったと述べている」と解説している。私はこの記述に接したいへん驚いた。毛が『楚辞集注』をニクソンにも贈ったとする新説は、ありえない。服部が周斌の言として引いているのは、久能靖「角栄・周恩来会談最後の証言」(『文藝春秋』2007年)である。久能の「なぜ毛主席がこの本を選んだのか、について、日本では、西の秦に攻められ、亡びてしまった楚の政治家、屈原に(田中を)なぞらえ

たのだ、という解釈もありましたが」という問いに周斌はこう答えた(と久能は記している)。「いや、それは違います。毛主席はニクソン大統領にも同じ本を贈っているのですから。毛主席は大変な読書家で、単に愛読書を贈った、というだけのことです。全く他意はありません」と周斌が述べたという。周斌は、毛沢東が田中に『楚辞集注』を贈る前に、「ニクソンにも同じ本を贈った」と語った由だが、これは根拠のない憶測である。このような事実は、中国でも米国でもこれまで一切記録されていない。周斌の記憶違いと見るほかない。そのような間違った記憶に基づいた雑誌記事を根拠として、橋本の「作詩説」との関係は問わぬままに、安易に注釈に付記する服部の書き方は、まともな研究者のやることではない。

毛沢東は田中の「ご迷惑」という日本語に知的興味を示しつつ、「迷惑」という言葉の使い方は、あなたの方が上手」と苦笑し、中国語の「迷惑 mihou」は、『楚辞集注』に書いてある通り、日本語とはまるで意味が異なる

ることを示す証拠として、6冊の線装本を用意していたのだ。毛沢東・周恩来の用意周到な気配りを考えると、橋本の作詩指導説は、根拠薄弱の曲解にすぎないことが分かる。チャイナ・スクール外しを行わなかったならば、外務省事務当局が毛沢東の真意を読みきれたかどうかは不明だが、外交とは、そもそも相手側の真意を読み切った上で、自らの要求を獲得することだ。相手側の意図がまるで分からない場合、外交はそもそも成り立たない。繰り返すが、私が橋本中国課長（のち中国大使）による日中国交正常化記録改竄をきわめて遺憾に思うのは、まさに彼の改竄によって、中国側の対日不信の直接的根拠を作っただけでなく、日本側が江沢民流の反日キャンペーンに異議申し立てを行う論拠を失わせた点である。田中の「ゴメイワク」という言葉遣いによる謝罪は、元来中国側の対日専門家にとって自明の事柄であった。それが外務省記録の改竄によって新たな火ダネが日中間に生まれ、広がり拡大したことが、国交正常化20〜30年の

日中相互不信の大きな要因の1つであり、その後遺症が半世紀後の今日、「台湾有事」論まで悪性腫瘍のように広がった。このような日中相互不信の内実にもまるで無頓着に、日中講和の精神を語り、官僚の放言に近い談話をもって、「埋もれていた現代史」をひもとくとは、百害あって一利なしではないか。国交正常化から半世紀、日本の新進研究者がここまで視野狭窄に陥り、国内の交渉体制、あるいは主張を論ずれば十分と認識しているかに見えるのは寒心に堪えない。

最後に一言。早稲田大学の毛里和子名誉教授は、『東方』（2012年5月号）および『中央公論』（2012年7月号）の服部著書評で「明晰なメッセージ」を発し、「抜きん出ている」と激賞した。日中共同声明の作成過程をめぐる双方の資料の大きな食い違いに、『日中関係』（岩波新書、2006年）を書いて石橋湛山賞を得た毛里書評はいう。「日本外務省が新たに開示した外交文書をふんだんに使い、直接間接かかわった人々とのインタビュー

をとともうまく活用している。そのため、本書は立派な史書でありながら、楽しく面白い「読み物」にもなっている」と。服部の宣伝文句にすぎない「新たに開示された外交文書」という説明を毛里は信じているらしい。実は、情報開示法によって公開された「田中・周恩来会談記録」は、1988年に外務省中国課が「省内執務資料」としてタイプ印刷したものと同じだ。「新たに開示された外交文書」が、十数年前の「省内執務資料」と同一であることが知らずに、毛里はこのように書く。

外務省関係者（おそらくは橋本恕）は、この時点で改竄した。そこで失われたのは、（1）田中が「誠心誠意の謝罪」を表明した部分と、（2）尖閣問題棚上げをめぐる「三問三答」のやりとりである。毛里が、日中紛争の核心に位置する、これらの論点に関心を向けないのは不可解きわまる。気づきながら、この欠陥本を激賞したとすれば、何をかいわんやだ。